2014年1月20日

博士学位論文審査報告書

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　井合真海子
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目　BPD傾向者における見捨てられスキーマとBPDの徴候との関連
The Relationships between the Abandonment Schemas and Borderline Personality Characteristics in Individuals with Borderline Personality Features
論文審査員　主査　早稲田大学教授　根建金男　博士（人間科学）（早稲田大学）
副査　早稲田大学教授　野村　忍　博士（医学）（東京大学）
副査　早稲田大学教授　鈴木伸一　博士（人間科学）（早稲田大学）

境界性パーソナリティ障害（borderline personality disorder: BPD）は、パーソナリティ障害の一つであり、感情の不安定性、衝動性の高さ、空虚感、対人関係の不安定さなどの特徴を有する(DSM-5; American Psychiatric Association, 2013)。医療を要するほど重篤ではないものの、BPDの徴候をもつBPD傾向者においても、抑うつ状態の悪化や対人関係機能の悪化など、様々な機能不全を起こしやすい(Trull *et al.*, 1997)。BPD患者／BPD傾向者の特徴として見捨てられ不安の高さが指摘されているが（e.g., Gunderson, 1984)、BPDと見捨てられ不安の関連を実証的に検証した研究はわずかである。本論文において、申請者は、BPD傾向者を対象として、認知行動理論の立場から、見捨てられスキーマ（見捨てられることに関する認知的枠組み）がBPDの徴候につながるメカニズムを明らかにしたうえで、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入の有効性を実証した。

本論文の第1章では、BPDの病理の特徴、BPDに関する理論、BPDに特徴的な見捨てられ不安の高さ、BPD傾向者の特徴について、先行研究を概観した。第2章では、認知行動理論の立場から、BPDの病理の理解とアプローチ方法、見捨てられスキーマの重要性について、先行研究を概観した。第3章では、第2章で取り上げた見捨てられスキーマに関する研究の問題点を論じた。

第4章では、第3章で指摘した問題点を踏まえて、本論文の目的と意義を論じた。本論文の主な目的は、見捨てられスキーマを測定する尺度の開発、見捨てられスキーマがBPDの徴候に及ぼす影響に関するメカニズムの解明、BPD傾向者の見捨てられスキーマに焦点を当て

て介入を行うことの有用性の検討であった。なお、本論文中の研究の母集団（母集団数：推定約 334,100）は、医療を要するほどではないが BPD の徴候を有し、BPD に移行するリスクがあり得る、BPD 傾向者で、どの研究の（主な）対象者も、BPD 傾向（青年期以降に発現しやすい）を有する大学生であった。

第 5 章では、見捨てられスキーマ尺度（the Abandonment Schema Questionnaire: ABSQ）を開発した。研究 1 では、内的整合性の高い 3 因子構造からなる尺度を作成し、それが十分な信頼性と併存的妥当性を有することを確認した。また、見捨てられ不安を測定する尺度および BPD の全般的なスキーマ群を測定する尺度と ABSQ との弁別的妥当性を検討し、ABSQ は BPD 傾向者の見捨てられスキーマに特化して測定ができる尺度であり、他の 2 つの尺度と弁別可能であることを示した。

第 6 章では、第 5 章で開発した ABSQ を用いて、見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響のメカニズムに関して、質問紙調査による検討を行った。研究 2 では、見捨てられスキーマが BPD の徴候である感情の不安定性や行動化に対して与えている影響について検討した。パス解析の結果、見捨てられスキーマが直接的に、あるいは感情の不安定性を介して、行動化に影響を及ぼしている、という因果モデルが支持された。研究 3 では、見捨てられスキーマが誘発している対処方略が BPD の徴候に及ぼす影響について検討した。パス解析の結果、見捨てられ場面において、見捨てられスキーマが「放棄・あきらめ」、「肯定的解釈の不足」といった認知的対処と、「効果的なコミュニケーションの不足」といった対人的対処を誘発して、それらの対処が BPD の徴候に影響を及ぼしている、という因果モデルが支持された。

第 7 章の研究 4 では、見捨てられ場面をイメージ想起する実験を行い、BPD 傾向高群と BPD 傾向低群における、見捨てられ場面での見捨てられスキーマの賦活の程度と、認知（自動思考）・感情・行動の違いを比較した。その結果、BPD 傾向高群は BPD 傾向低群に比べて、見捨てられスキーマが賦活しやすく、BPD の徴候に関連するような自動思考・感情・行動が誘発されやすいことがわかった。また、見捨てられスキーマに関連する思考が、研究 3 で示されたような不適切な対処を誘発している可能性が示唆された。さらに、見捨てられ場面の相手の親密度の高低によって、賦活しやすい見捨てられスキーマの因子が異なり、その後の自動思考・感情・行動が違うという結果が得られた。

第 8 章では、研究 1～4 の結果をふまえて、見捨てられスキーマの変容に焦点を当てた介入の有用性を検討した。研究 5 では、見捨てられスキーマの内容特殊性に注目して、BPD 傾向者を対象として、2 週間の短期的介入実験によって、見捨てられスキーマの内容を反証する認知的再構成の手続きの効果を調べた。その結果、見捨てられスキーマが強固である BPD 傾向者においても、見捨てられスキーマの内容を反証する操作は可能であることが示された。一方、見捨てられスキーマの内容の反証の手続きのみを用いる短期的介入では、見捨てられ

スキーマの認知的枠組み全体の変容は難しく、BPD の徴候の改善までは至らないため、長期的・多面的介入が必要であることが示唆された。そこで研究 6 では、8 週間の長期的介入実験によって、研究 5 の見捨てられスキーマに対する反証手続きに加えて、研究 3 で明らかになった見捨てられスキーマが誘発する対処の変容を意図する手続きを実施することの効果を調べた。その結果、見捨てられスキーマに焦点を当てた群は、見捨てられスキーマに焦点を当てずに認知行動療法的な介入を行った群、および実験期間は何も介入を行わない Waiting List 群と比較して、ABSQ の得点および BPD の徴候の一つである行動化の得点がより低減していた。よって、BPD 傾向者において、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体の変容を意図する長期的・多面的介入を行うことが、BPD の徴候の中でも特に行動化の改善につながることが示された。

最終章である第 9 章では総括的考察を行った。本論文の研究 1～6 によって得られた成果、本論文の意義、本論文の限界と課題について考察した。本論文の研究 1 では、見捨てられスキーマを詳細に測定する信頼性・妥当性が高い尺度を開発した。本論文の研究 2～4 においては、見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響のメカニズムについて、質問紙調査と実験的手法を用いて検討した。その結果、見捨てられスキーマが BPD の徴候に影響を与える中核的な要因であること、不適切な対処を誘発することによってさらに BPD の徴候を強めていることが明らかになった。本論文の研究 5・6 では、BPD 傾向者を対象として、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入研究を行い、見捨てられスキーマの変容が BPD の徴候の改善に与える影響を検討した。その結果、見捨てられスキーマの認知的枠組み全体に焦点を当てた長期的・多面的介入の実施が、BPD の徴候の改善につながることがわかった。これらのことから、本論文によって、BPD 傾向に対する独自な理解とアプローチの可能性が開かれたと言える。今後の課題としては、BPD の徴候の一つである行動化のみならず、BPD の徴候全体を改善する介入プログラムの必要性などが挙げられた。

本論文において高く評価できる主な点は、以下の通りである。

(1) 本論文において、見捨てられスキーマを詳細に測定する有用な尺度を開発した。これにより、従来の尺度では十分に捉えきれなかった見捨てられスキーマの内容特殊性の詳細を明らかにすることができる。したがって、この尺度は、BPD 傾向者の現状を理解したり、心理的介入による BPD 傾向の変容について把握したりするためのアセスメントツールとして、今後大いに活用される可能性がある。

(2) 本論文では、見捨てられスキーマが BPD の徴候に与える影響のメカニズムについて、見捨てられスキーマが誘発している不適応的な対処も考慮に入れて包括的に明らかにした。これまで BPD 傾向者の見捨てられスキーマに焦点を当てたメカニズム研究はほとんど見受けられないが、本論文は、見捨てられスキーマが BPD の徴候に影響を与える中核的な要因であ

ること、不適切な対処を誘発することによってさらに BPD の徴候を強めていることを初めて明らかにした。したがって、本論文の成果は、BPD 傾向者の BPD の徴候に関する理解を広げるための重要な契機になると期待される。

(3) 本論文では、見捨てられスキーマに焦点を当てた介入が BPD の徴候の改善に有効であることを示した。BPD 傾向者における見捨てられスキーマの影響に関するメカニズムの理解に立脚した、見捨てられスキーマに特化した介入を行うことの有用性を実証したことは、本論文独自の貢献である。本論文で得られた知見は、今後の BPD 傾向者に対する効果的な支援法の発展に寄与するものであり、心理的介入の実践にも資するところが大きいと考えられる。

なお、本論文（一部を含む）が掲載された主な学術論文は、以下の通りである。

[1] 井合真海子・矢澤美香子・根建金男　見捨てられスキーマが境界性パーソナリティ周辺群の徴候に及ぼす影響　パーソナリティ研究、19、81－93（2010）

[2] 井合真海子・根建金男 見捨てられ場面における見捨てられスキーマと思考・感情・行動との関連　行動医学研究、19、83-92（2013）

本論文は、臨床心理学／カウンセリング心理学の発展に貢献する可能性がある独創的な知見を提示しており、非常に優れている。よって、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上